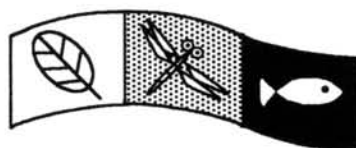
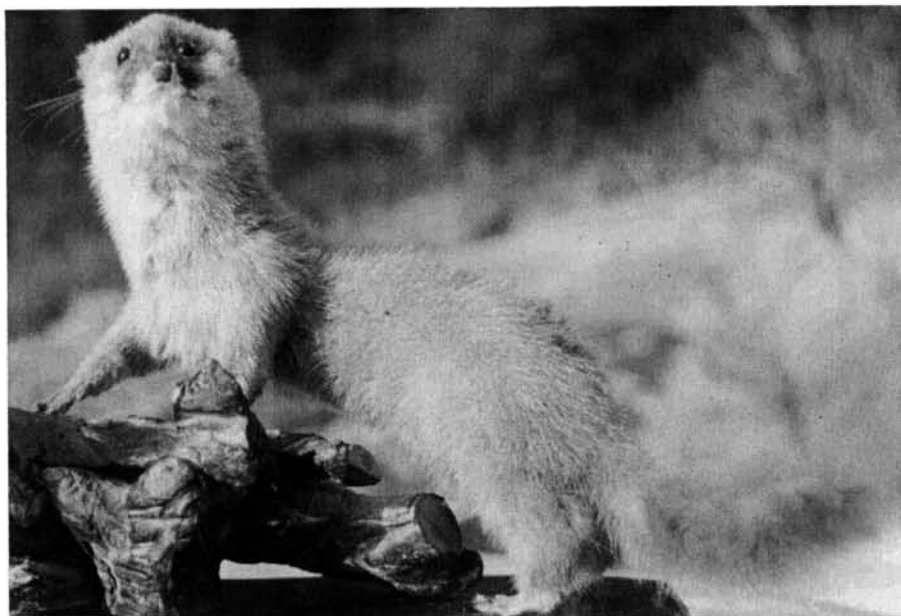


Rio



リオ ~ 豊田市矢作川研究所 月報 ~ No. 34



豊田市西広瀬町で捕獲されたイタチの剥製 (1996年2月21日 梅村金享二 撮影)

市民に実感できるデータの大切さ — 矢作川研究所への期待を込めて —



高橋 勇夫

2年前の春、矢作川に天然アユを復活させるための16項目の保全目標が発表された。

この目標の策定に向けて、矢作川のアユの現況調査から専門家という立場で3年間参加させていただき、私自身得難い経験をした。

この16項目の内容については矢作新報などでも紹介されているので、ここでは省略させていただくが、この目標を策定するプロセスには、これまでに日本には無かった(少なくとも私はこのような事例を知らない)新たな潮流をみることができる。

その最も特徴的な点は、地元の方々が自らの手で2年間にわたる現地調査を行い、その結果を基

にさらに1年をかけて16項目の目標を考え出したことにある。

もちろん、調査の手法については専門的な立場から指導させていただいたが、その手法を理解し、実行したのは、釣り好きであったり、生き物が好きであったりする「普通の市民」の皆さんであった。

通常、このような目標を策定する場合、専門のコンサルタントや大学の専門家に委託するケースがほとんどと言って良い。それはそれで良い面が多いことは否定しないが(私自身このようなことで生活が成り立っているので決して否定しない)、その内容が地元の方々に本当に理解されている

か、という点では少なからず疑問を感じる。

ひどい場合には、全く非科学的であったり、全国どこでも通用するような一本当は通用しないのだが、地域特性のないものであったりする。それらは論外とするとしても、少なくとも地元の方々には実感を持って受け入れられ難い面がある点は、否定できない事実であろう。そして、この点が目標を実行に移す段階で、もっと大きな問題となることは想像に難くない。お互いの不理解から対立構造が生まれた場合、高い次元での調整策が見出せないままとなった例はあまたとある。

保全目標策定に向けての一連の調査に参加した皆さんの当初の動機は「矢作川でアユを釣りたい」といったきわめてローカルで、個人的で、それゆえに純粋な欲求に根ざしたものであった（と私には思えた）。しかし、自らの手で調べることで、データあるいは資料が意味することを実感を持って理解でき、このことが自分たちの住む矢作川流

域の抱える複合的な問題をより深く理解することにつながったように感じられた。最後の年に行った目標の策定の過程で、「次世代にどのような矢作川を残すのか」という観点から議論がなされたことは、このような裏付けがあったため、意義深いことであった。

矢作川研究所は地域に根ざした研究所として設立された。市民と共に調査研究を行い、市民に「実感」の伴うデータを蓄積することができれば、地域の抱える問題点は理解されやすくなる。なにより「自分たちの問題」として実感できることによって、その解決策を考え、再び市民共同で実行に移すというプロセスがこれまでよりも格段にスムーズに運ぶことが期待できる。そうなれば「地域に根ざす研究所」の存在意義はきわめて大きい。

（たかはし いさお、
西日本科学技術研究所 生物研究室 室長）

太田川河川愛護会

—10年後・20年後をめざして！—

平松 清文



『太田川』と書いて「だいたがわ」と読みます。どこにあるかご存知ですか？この川は松平地区を流れる巴川の支流の支流になります。豊松町から大内町にかけて流れ、大内町で滝川と合流し、巴川へ流れ込む小さな小さな川です。

平成7年度より滝川の合流地点から上へ700mの河川改修が土地改良事業と平行して行なわれ、最近によく耳にしますが『近自然工法』という、魚が住める自然に近い尚且つ災害に強い改修工法で、6年間の歳月をかけ平成12年3月に完成し

ました。

そしてこの河川改修の完成を機に平成12年4月より15人で愛護会を結成しました。活動範囲はこの河川改修が行なわれた700mの間で約10,000㎡です。活動は毎月第4土曜日の午前中。活動の内容としては、草刈り、ごみ拾いが主ですが、4月から10月まではほとんど草刈りです。

私たちの地域は山間地域で、お役で草刈を行なう範囲が広くまた回数も多いです。それに加えてそれぞれの田畑の草刈りと年中草刈を行なってい



る状態です。その中で新たに河川の草刈りが毎月1回あるということは、すごく大変です。そこで、会員の負担にならないように、活動日としては毎月第4土曜日と決めています。強制はせず、都合のつく会員で出来る範囲、時間としては2時間から3時間の範囲以内で活動をするようにしています。

今後は、「もみじ」とか「さくら」などを植樹し、

10年後、20年後に四季を感じながらのんびりと散歩できるような、また子ども達が常に川で遊び、そしてふるさとの川として思い出に残るようなそんな川にできたらいいなと思います。

活動は、夢をもって楽しんでゆっくりと行なっていきたいですね！

(ひらまつ きよふみ、

太田川河川愛護会 会長)

連載



ちごのくに

児ノ口公園の四季

2月 -春の息吹-

成瀬 順次

ネコヤナギのホワホワの毛の玉が包んでいた殻を破り、頭にちょこんと殻の帽子をかぶっている姿は、春がそこまで来ているのを感じさせます。昔の人が言い伝えた三寒四温の中で、公園の中の生き物が少しずつ揺り起こされてきています。

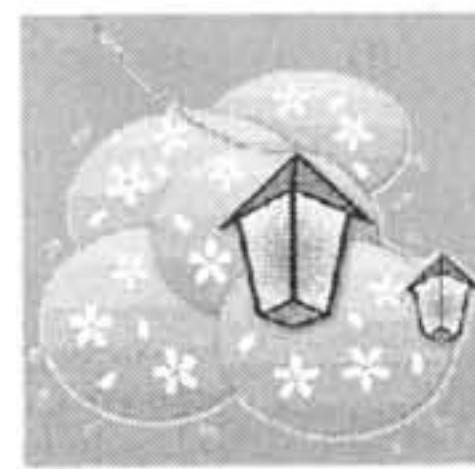
12月に報告できなかった、児ノ口公園のメインイベントである餅つきの様子を少しばかり書いてみます。

早朝、紫米でまず一臼の餅をつきあげました。そして早出のみんなで鎮守の神、児ノ口神社へ一年の感謝とこれからのみんなの健康と幸せの願いを込め、奉納いたしました。当日は地元の人々、どこでもギバー隊（トヨタボランティア）、それに崇化館公民館の親子教室の人達も加わり、100人程の大にぎわいでした。まるで児ノ口村の村民がみんな出てきた感じでした。ワイワイガヤガヤの楽しい一日でした。何度も言いますが、自然は人を本来の姿に戻してくれます。素晴らしい力です。



「児ノ口の雪景色」 杉山亘氏 撮影

2月はみんなでホタルのお宿、五六川の大掃除をしました。そしてホタルの餌のカワニナが育ちやすいようにと丸い大きめの石を五六川へ入れました。3月にはホタルの幼虫を放流します。今は何人かの里親の元で、放流の日を今か今かとスクスク育っています。



最新情報です。東区の伊藤区長さんが公園の自然が育ってきたのを見て、つい先日児ノ口桜まつりの再現を発表しました。地元の各組織の人達総出の企画が始まります。Rio読者のみな

さんもぜひぜひ出かけてください。来月号では予告が遅れてしまうと考えると、今月号でお伝えいたします。

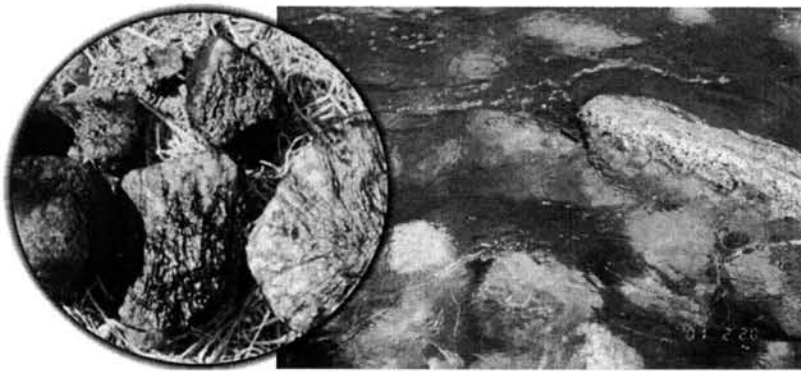
2月・3月の自然

サザンカの花が色づき、シダレヤナギ、ソメイヨシノ、シダレザクラが芽吹き、ヤブツバキの花がほころび、フキノトウ、ツクシが頭を出し、極秘のノビルが雑草のかけでしすかに育っています。

(なるせ じゅんじ)



研究所の調査風景 ～2月～



旭町池嶋の矢作川 2001.2.20

2月20日(火)
昨年9月の洪水後の水生生物の回復をみる目的で継続している広域調査を行いました。矢作ダム上流の稲武町大野瀬(根羽川)から古岸までにある調査地点では糸状藻類であるカワヒビミドロ(*Vlothrix zonata*)が発生していました。特にダム直下に位置する旭町池嶋では川底が黒々と見え異常発生のすごさを物語っていました。矢作川で春、秋に大発生を繰り返しているカワシオグサより柔らかい手触りです。



シンポジウムの様子 2001.2.22

2月22日(木)
「あたらしい流域の文化を考えよう」
矢作川河口周辺海域アユ調査委員会が開かれました。四万十川や三重県宮川河口でのアユの生態調査が紹介されたほか、温排水調査の一般論についてお話がありました。2つの調査事例では海という大自然を相手にした過酷な調査の積み重ねによって、少しずつアユの生態が明らかにされているようです。これらの事例を参考に、三河湾という浅い内湾をどうとらえるかが鍵となっています。
以上らの報告を基にして、矢作川の調査について実施方法や問題点が議論されました。次回の調査委員会は6月に開催される予定です。



去る吉日、豊田市森林組合より矢作川研究所の看板をご寄贈いただきました。この看板に恥じない研究成果を目指したいものです。ありがとうございました。

お知らせ



「と題された、第6回 豊田市矢作川研究所シンポジウムが名鉄豊田ホテルで開かれました。講師の秋道智彌先生からは流域の保全と自然保護を進めるにあたってキー・シンボルの考え方を岩手県大植川のイトヨと鹿児島県奄美大島のリュウキュウアユやアマミノクロウサギを例に講演いただきました。そして、矢作川ではキー・シンボルは可能かという問いかけをいただきました。嘉田由紀子先生からは琵琶湖とその流入河川を例に、川と人の関わり方の歴史を通して「河川は誰のものか？」を考える機会を与えていただきました。

編集後記

研究所の一大イベントであるシンポジウムも盛況に終わりました。人と川がどうつき合っていくか、そこに生息する魚や虫や植物の生息権も十分に尊重しながらよりよい関係を生み出していければと思います。毎日に日ざしも明るさを増しています。新しい世紀の春はどのような顔を見せてくれるでしょうか？ (内)

*** ご意見、ご感想をお寄せください。 ***

発行：豊田市矢作川研究所 〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

tel. 0565-34-6860 fax. 0565-34-6028 e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/index.html>